

風土



七輪に鯨たらたら稿なりて

(句集『竹取』より昭和三十六年作)

桂郎師の食通ぶりは有名です。「七輪に鯨たらたら」とありますから、血のしたたるような鯨肉を焼いているところですよ。普通は野菜をたつぶり入れて「鯨汁」にしたり、すき焼風に「鯨鍋」にしますが、桂郎師の場合お酒の肴にするので、直接焼いているのです。もちろん、もう一方の手にはコップ酒が握られています。「稿なりて」にひと仕事終えた安堵感があります。

大根引く音の不思議に時すごす

(句集『竹取』より昭和三十六年作)

この時代、桂郎師も畑を借りていたのかもしれませんが。おそらく初めて大根を抜いたのでしょう。その音にはっとしたのです。あの小さな種が丸々と太った大根に成長したのです。「音の不思議」には命の不思議も含まれています。命への関心がないと「大根引く音」は聞こえません。桂郎師の細やかな感覚がとらえた世界と言えるでしょう。

夕立後夕立前のこと思ふ

(句集『能ヶ谷』より昭和五十八年作)

この句は器師の意識の在り様の独自性が現れていて興味をそそられます。木々や草、また家々も夕立で洗われた清浄な世界を目の当たりにしながら、この同じ世界が「夕立前」はどうだったのか。ぎらぎらと照りつける日差しの中で何を考え、何を見ていたのかぼんやりとして思い出せないのです。このような意識は私たちも経験するのですが、器師はあえて句に定着させるのです。

炎天のどこにも触れず戻り来ぬ

(句集『能ヶ谷』より昭和五十八年作)

「花かたかご」は山林の半日蔭、斜面に群生するユリ科の多年草です。三月、四月ごろ紅紫色の花をうつむかせて咲きます。その清楚で可憐な姿は乙女に喩えられます。器師はこの「花かたかご」に出逢えた喜びを「百里来て」と大仰にことばを置き、さらに「秘中の秘」と愛でるのです。まるで誰にも知られたくない恋人だけに贈ることばのよう。

五月来る

南うみを

山笑ふソーラーパネル従へて

花鳥にならむと雀もぐり込む

荒々と虚子忌のさくら畠に鋤き

あかときの雫の蕨摘みにけり

鱈てふ光の棒を提げ来たる

君吟醸吾は若狭の煮蕨ぞ

きんぼうげ寺の蕨のことに照り

大鯉にもんどりうつて浮葉かな

杉山を攻め登りつつ竹の秋

五月来とからすのゑんどう立ちあがる

手をひけば児の足浮いて大原志

田植機の轍を跳んで大原志



竹間集

同人作品



飴袋 浅田 光代

雲つかむかに春眠へ入りにけり
ゆで玉子ひとつころがる花見莫塵
白川や鴨はつむりに花つけて
花ふぶく銅像なべて美男美女
さへづりや回されきたる飴袋
そぞろ貌して花冷の壬生の面
鯉幟あげて新撰組屯所

春 柿沼 盟子

静かなる昂りを秘め花衣
やはらかき雲二つ三つ仏生会
足もとを早瀬のごとく飛花落花
初蝶の行きつ戻りつ高さ増す
発車ベル鳴りて眠たき春の昼
ゆつくりと列車高架へ春の宵
最上階に始む窓拭き夏隣

五月来る 高村 令子

タンポポや不足の思ひ無き米寿
花吹雪生きてゐること不図忘れ
はらはらとたましひこぼす夕桜
地球てふ星麗しや五月来る
耕して生き抜く大地朝日さす
振り向かす風すでに過去花は葉に
新緑や風を歩いて風となる

桜どき

土井三乙

啓蟄なり日曜なれば二度寝して
酒旨しふきのたう味噌良く出来て
草萌や抱きあげて子の重きこと
立たされてをる子は吾や目借時
春の昼回転椅子が窓向いて
欠伸よく出る日なりしよ日の永き
濠の水やさしかりしよ桜どき

水のひびき

林いづみ

春宵のレインボーブリッジ灯をおごる
武州中川清雲禅寺糸桜
乾坤のあはひやさくらみなぎらふ
桜鯛お造り兜煮カルパッチョ
朧夜の嘘に誠のありにけり
たまきはる白王獅子のいのちの炎
夏近し水のひびきは珠となり

うららけし

小林共代

白鳳の瑠璃光菩薩うららけし
平安のお狩場跡やつくづくし
千年の昔を今に松の花
二百年の業平桜宙にかな
囀りや塩竈にある火の匂ひ
牡丹の白さ天使の白さとも
土手よりも低き一村陽炎へる

肥後の椿

中根美保

切株に新旧ありて囀れり
昼月のこと誰も言はず葱の花
錆色もゆかしき肥後の椿かな
山桜一本道に迷ひけり
伐り詰めし枝にたわわや夏蜜柑
基地を発つ機影しきりに蝌蚪の水
遠足の列の伸びたる水辺かな

山河集

同人作品



南うみを選

しやぼん玉大きくゆがみ離れざる
花曇夕月匂ひ出づるやう
多摩川のはじまる一滴囀れる
ひとりだけ横向く入学写真かな
囀や飯盒飯の出来上がる

津川かほる

阿夫利嶺の風に力や葱坊主
虻らしき何か怒つてゐるらしき
さはさはと風の乗り継ぐ草若葉
雪洞に灯の入る祇園花曇
亀鳴けば振り向く皇宮護衛官

内藤 静

ロザリオのしるき手ずれや花曇
忘却は神の恩寵しやぼん玉
新聞のネット購読啄木忌

川田 好子

家ぬちに澱みそこはか夏隣る
欄干に力士の手形うらけし

平安神宮紅しだれコンサート

篠笛や夜空を焦がす紅しだれ
白粉のほのと祇園の花明り
たぶたぶと十石舟や花霞
清水の舞台の如き蜃気楼
ワンサイズ大きな靴で入学す

奥田 茶々

野遊びの真下を走る送油管
長閑しやビルより長きビルの影
寂聴の口語源氏や囀れり
しやぼん玉夢の如くに旅終はる
永き日の歩いて降りる百二階

豎山 道助

風土独語／南 うみを



しやぼん玉大きくゆがみ離れざる

津川かほる

よく見ること。よく見てはつとしたことを的確なことに置き換え、読み手に想像させること。「大きくゆがみ離れざる」は今できつつある「しやぼん玉」を見事に描いています。

吾病むと子らの痩せをり竹の秋

福田 周草

作者は百歳にならんとする長寿の方です。今病に臥せ、子供たちの看病を受けています。しかし心は自らの病ではなく、痩せ細らんとする「竹の秋」に重ねて「子ら」を氣遣うのです。

阿夫利嶺の風に力や葱坊主

内藤 静

「阿夫利嶺」から下りてくる風が日増しに強くなつてくる中で、畑の「葱坊主」たちが雄々しく立っています。「阿夫利嶺」の雄々しさに負けていません。

花ぐもり絵本の店に木の匂ひ

中嶋 陽子

この句は「花ぐもり」と「絵本の店」の取り合わせですが、細部を表現することでリアリティを得ました。それが「木の匂ひ」です。読み手は「花ぐもり」に包まれた、明るくウツディな温もりのある、手作りの「絵本の店」を想像するのです。

家ぬちに澱みそこはか夏隣る

川田 好子

この句は夏近い家の中の空気感を繊細に捉えました。春でも夏でもない微妙な感覚が「澱みそこはか」です。ことばにされて、そうだなと頷かれます。

木漏れ日の障子にたまる初音かな

岡 尚

まず「木漏れ日の障子にたまる」で木立に囲まれた家を想像し、また「木漏れ日」が絶えず降り注いでいるのを「たまる」と表現しました。そこへ鶯の初鳴きです。作者、至福の時です。

ワンサイズ大きな靴で入学す

奥田 茶々

「ワンサイズ大きな靴」をどう読むか。小学校か。中学校か。また他の入学生に対してか。いろいろと想像できます。ともあれ読み手に入学生の健やかな成長を伝えてくれます。

花曇片手は浅くポケットに

石井 秀一

「花曇」の暖かな明るさの中の所作を、「片手は浅くポケットに」と置きました。冬と比べたら「浅くポケットに」が適切なことばであることが解るでしょう。すべては桜のせいです。

永き日の歩いて降りる百二階

豎山 道助

「百二階」ですから摩天楼のような高層ビルの階段です。そこを「歩いて降りる」とは現実離れしています。「永き日」の春の喜びが作者に想像させました。このような想像は楽しい。
<以下略>

風土集



南うみを選

吾病むと子らの瘦せをり竹の秋

舞鶴

福田周章

日の笑ふ生在るあまた囀れる

大いなる地球功績余花残花

本宅の屋敷畑なる麦の秋

万緑の奥底に生き水を呑む

花ぐもり絵本の店に木の匂ひ

東京

中嶋陽子

「折々のうた」なき朝の遠蛙

馬場に立つ姿鏡や花曇り

水温む子ども相撲の四股の音

つぶらなる瞳の宿るしやぼん玉

春光やピーターラビット初版本

相模原

岡 尚

一斉に馳けだしさうなチューリップ

北上の山河のひびき啄木忌

木洩れ日の障子にたまる初音かな

囀りの奥のさへずり浄瑠璃寺

風光る塩振れば散る茄で玉子

神奈川

石井秀一

蕉翁の居さうな庵囀れり

花曇り片手は浅くポケットに

つくし野や去らむとしてはまた屈み

帆柱の揺れ三拍子長閑けしや

名を捨てて海となる川花曇

相模原

岡本尚子

ビッグバンで生まれし宇宙しやぼん玉

追ひかけて犬の飲み込むしやぼん玉

草ひけば土にほひ立つ彼岸かな

村の畑みな良地なり花月夜

病室の窓や日毎の雪の富士

横浜

池田加代子

リハビリのメンタルテスト春寒し

恢復や夫に添はれて青き踏む

摘み行くや指に優しき草若葉

花車とらやの菓子の見本帳